

「浜松ホストライオンズクラブ会長賞」

よりそっていくこと

浜松市立江西中学校 二年 富田 くるみ

「祖母に認知症の症状が出始めた。共働きの両親が不在の間、見守るようになった。最初はお手伝いの延長のつもりだった。」

小学校三年生の時にヤングケアラーだったという方の体験談を新聞記事で見た。私は、この本を読んで、「ヤングケアラー」という言葉に衝撃を受けた。そして、その実態を調べるため、過去の新聞記事を探した。「症状が進行し、夜中に食べ物を勝手に食べてしまう祖母をなだめる日々。寝不足で朝、起きられなくなった。学校を休み、祖母を介護した。話し相手になり、昼食を準備して一緒に食べた。失禁の後始末をすることもあった。」という。小学校三年生にして、ここまで家族を背負わなければならぬなんて、今まで考えたこともなかった。しかし、もし自分の祖

父母や両親の介護が必要になったとしたら、自分がヤングケアラーの立場になるかもしれないのだ。中学二年生の自分に、一体何ができるのだろうか。そう考えたとき、私の頭は真っ白だった。何も思いつくことがないということに気付いた。私のように、家族の介護のことなど想像さえできずに過ごしている中学生は多いだろう。私は、せつかくこの本を通してヤングケアラーについて知ることができたのだから、この問題について、自分なりに向き合ってみようと思った。

「わたしは、いなくなんて、なれないんだ。」

自分が頑張らないと家族が壊れてしまうと行って、朱音は、すべてを一人で抱えこんでいた。家族のことだからこそ、困っていることや辛い状況を、人に話せなかったり、同情されたくないがために助けてとすることができなかつたりする。また、そこから逃げ出すこともできない。そんな朱音の境遇を思うと胸が締めつけられるような気持ちになった。

朱音のように、ヤングケアラーとして家族を世話している中学生は、全国で約十七人に一人の割合でいるのだそうだ。そして、その六割以上の人が、人に相談したことはないと答えている。驚いたのは、その最も多い理由で、「人に相談するほどの悩みではない。」というものだ。きっと、

朱音も同じ気持ちだったのではないだろうか。今の状況を仕方のないものと受け止め、様々なことを諦めながら生活していたのではないか。私はそう思った。現実には、学校に行きたくても行けなかったり、進路で諦めたりしている人は多いのだそうだ。そして、今、この問題を社会全体で真剣に考え、支えていこうという動きがあることも知った。

夜の公園で一人、ほんのつかの間の息抜きをしていた朱音。そんな朱音に出会ったのが悠人だった。悠人もまた、自分の家庭環境に不満を感じ、自分の存在意義を感じられないという悩みを抱えていた。そんな二人は、互いに心を開きお互いに寄り添うようになっていく。他のだれか

を支えたいと思うとき、人は強くなれるのだと、悠人の姿から感じた。

悠人は、確実に成長し、自分や周りの家族への見方が変わっていったと思う。朱音の状況を理解し、不器用ながらも支えになりたいという自分の気持ちを伝えていった。これで大丈夫。朱音に理解者ができて、支えてくれる悠人がいれば、前向きに生活していけると思った。しかし、現実にはそれほど甘くなかった。話を聞いて寄り添うだけでは、家族を介護するということは、解決しない深刻な問題なのだ。中学生の二人が立ち向かうには、限界があるのだ。私は、そのことに気付いた悠人は、人として成長したと思った。朱音の悩みを二人だけの問題で終わらせず、母親に相談し、本気で朱音の直面する問題を解決しようと行動を起こしたのだ。大人の意見を聞き、より方法を真剣に見つけることは、朱音のことを本気で支えていこうとする悠人なりの覚悟だったのだと思う。そのことで、朱音に光が見え、道が開けていった気がする。

この作品の題名の「ウィズ・ユー」は、読む前は悠人と朱音のことだ
相手 の 痛みに 寄り添い、一緒 に 前を 向いて 進んで いける ような 人に、私
も、成長 して いきたい。

と思っていた。しかし、そこには、悠人と朱音を取り巻く人々がそれぞれ
の想いを持って寄り添っていることに気付いた。悠人の家族や友達、
朱音の父親も、自分から心を開き、見方を変えれば、みんな自分に寄り
添ってくれる、「ウィズ・ユー」の存在なのだと思う。ヤングケアラーの
問題も、誰かが傍らで寄り添い、気持ちを聞いてあげること、救われ
る人が沢山いるに違いない。そして、悩んでいる人を独りぼっちにせず、
当たり前のように支える社会になれば、解決していけるのではないだろ
うか。

もし、私の周りに悩みを抱えている友達がいたとしたら、私はそのこ
とに気付いてあげられるのだろうか。この自問自答は、作品を読み終え
てからずっと続いている。この作品を読んで、友達を思いやり、少しの
変化にも気付くことができる自分でありたいと強く思うようになった。

書名 with you (ウィズ・ユー)

著者名 濱野 京子

発行所 くもん出版

